

主 題：あなたは主に用いられたいか？

聖書箇所：ルカの福音書 10章1－20節

今日はルカの福音書10章1－20節をごいっしょに見て行きましょう。恐らく皆さんはこの2節のみことばをよくご存じだと思います。「**実りは多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主に、収穫のために働き手を送ってくださるように祈りなさい。**」。いろいろな所に宣教に行くと、このことばが繰り返されて私の中に響いてきます。というのは、今日私たちが見ようとしているこの聖書の箇所は私たちに、イエス・キリストご自身の「主の宣教の計画」というものを教えるからです。順に見て行きましょう。

☆イエス・キリストご自身の宣教の計画

1. 宣教の目標

イエスはルカ4：16から9：50まで、ガリラヤ湖周辺で働きをなさっていました。そして、9：51から19：44までは、イエスはガリラヤを後にしてエルサレムへと向かって行かれる、その様子がこの箇所に記されています。ですから、この10章の初めを見たとき、イエスはエルサレムの方へ向かっておられたのです。そして、1節にあるように「**その後、主は、別に七十人を定め、ご自分が行くつもりすべての町や村へ、ふたりずつ先にお遣わしになった。**」と、すべての町や村へ弟子たちを派遣して行かれるのです。どのようなルートを取られたのか私たちには分かりませんが、少なくともイエスはエルサレムに行くまで、様々な町や村を訪問してメッセージを語ろうとされたのです。神のすばらしさを教えようとした、救いのメッセージを語ろうとされたのです。弟子たちはどうだったでしょう？ペンテコステの出来事の前、使徒の働き1：8に御使いが弟子たちにこのようなことを言われました。「**しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。**」と、御使いたちが弟子たちに告げたことは、エルサレムから始まるけれどそこに留まるのではなく、そこからユダヤにサマリヤに、そして、地の果てにまでと、これだけを見ても私たちにはよく分かります、神の宣教の目標は全世界です。この日本だけでない、世界中が私たちの畑なのです。私たちは、私たちが世界中に出て行ってこの福音を知らせるということを、神は私たちに命じておられることを当然知るので、だから、パウロもイエスを信じた後、神の導きに従って彼は至る所に出て行って福音を伝えようとしていました。ヨーロッパにも出て行きスペインにも行こうとしました。神がその道を開いてくださるなら…、なぜなら、畑は世界だからです。そして、すべてのクリスチャンに神が与えられた大命令は、皆さんもよくご存じのように、全世界に出て行ってすべての人を弟子としなさいです。私たちの畑は世界です。宣教の目標はこの小さな自分の住んでいるところだけでない、世界中が私たちの宣教の対象です。そのことを私たちはまず、イエスがエルサレムに上る途中に様々な町を訪問しようとしておられたことから知ることができ、そして、このみことばが私たちにこの宣教目標を明らかにしてくれるのです。

2. 宣教の時期

いつ宣教をするのかです。2節のみことばをもう一度繰り返しますが、「**実りは多いが**」と言います。また、ここには働き手、収穫、収穫の主ということばがあります。イエスが敢えてこのようなことを言われたのは、この当時の人々、この地域の人々によく分かる話をもってメッセージを伝えるのです。しかし、これはこの当時のこの地域の人々だけでなく私たちにもよく分かることです。稲穂が色づいているとき、刈り入れをしなければいけないときが今日の前にある、でも、働き手がない、稲を刈り入れる人がいないと、この状況は私たちも描くことができます。ですから、イエスが話そうとされたことは明確です。イエスが言われているのは、稲穂が色づいているのは今だ、今が収穫のときだということです。では、いつ宣教を始めたらいのかというと、来年でもない、その次でもない、今そのことをしなければならぬ、なぜなら、今穂は色づいているから。ですから、このみことばを見たとき、この福音宣教の緊急性というものをイエスは教えておられるのです。今出て行って、今その刈り入れをしなければならぬです。4節を見ると「**財布も旅行袋も持たず、くつもはかずに行きなさい。だれにも、道であいさつしてはいけません。**」と記されています。イエスが言いたかったことは緊急性を要するものだという事です。旅の準備をする時間はない、今すぐ行きなさいということです。あいさつをするなど言われているのは、ユダヤ人たちのあいさつは非常に時間のかかるものだったから、ここでも出て行く緊急性を言っているのです。しかも、この当時、この地域ではたくさんの人々が道路や公共の広場で生活をしていました。女性は家で働きましたが、男性は広場や道路に集まって来るのです。敷居の前とか階段の踏み板の所、あるいは日陰の隅に座っていたのです。確かに、この地域、ギリシャや中近東に行くとそのよ

うな光景を見ます。人々は座っています。ですから、そこを通ると知り合いに声をかけられてあいさつが始まります。そうするとなかなか目的地に到達できないのです。だから、あいさつをしないで早く行きなさいというのです。このような出来事は旧約聖書の中にも出て来ます。エリシャというひとりの預言者がいました。シュネムという所を通りかかったとき裕福な夫婦に出会うのです。彼らは自分たちの家の屋上に、この神の人エリシャのために彼がここに来たときはいつもそこに泊まれるように小屋を作るのです。エリシャは彼らに何をしてあげようと言います。若い者ゲハジは彼らには子どもがいないことを告げます。エリシャはでは来年子どもが生まれていると言います。そして、実際に子どもが生まれましたが、少し大きくなってから亡くなってしまいます。この裕福な女性はエリシャの所に走って来ます。そのときエリシャはゲハジに言いました。「腰に帯を引き締め、手に私の杖を持って行きなさい。たといだれに会っても、あいさつしてはならない。また、たといだれがあいさつしても、答えてはならない。」と、このようなことがⅡ列王記4：29に出て来ます。つまり、早くそこに行きなさいということを行っているのです。ですから、イエスはここで早く畑に行きなさい、刈り入れのために早く出て行きなさいと緊急性を表わしたのです。

3. 宣教の方法

どんな方法で主はこの神のすばらしさを伝えようとしているのかです。もう一度、1節を見てください、「その後、主は、別に七十人を定め、ご自分が行くつもりのすべての町や村へ、ふたりずつ先にお遣わしになった。」と、主が定めたとありますが、この「定めた」ということばは任命する、ある役目に任命するという意味をもったことばです。主がこの70人を招かれて、そして、福音宣教のために彼らを任命されたのです。聖書のその箇所の欄外のところをご覧になると、※のところにも異本72人と記されています。どちらかよく分からないのです。12使徒があり、ヤコブの12人の息子たち、イスラエルの12部族と12という数から70という数字が出てきたとも言われますが、いろいろな説があります。これはイスラエルの長老の数ではないか、それは民数記11章に出て来ます。モーセが大切な働きを長老たちに分け与えて行くのですが、そのときに会見の天幕に連れて来られた長老たちの数が70人、そして、宿営のところに二人残っていたのです。エルダデとメダデ、彼らを含むと72人になる、だから、この長老の数に由来しているのではないかとされます。また、ある人はこれはユダヤ人の最高議会であるサンヘドリンの議席の数である、彼らは本来救世主の到来を待望していた人々だからと。また、ある人はこれはその当時の人々が信じていた世界の国の数に匹敵すると言います。創世記10章を見るといろいろな名前が出て来ます。ノアの息子たちのセム、ハム、ヤペテから出たたくさんの子どもの名前が出て来ます。ヤペテ15、ハム30、セム27とその数を合わせると72人です。その当時はそれ位の国が存在すると信じられていた、だから、イエスが70人あるいは、72人を選ばれたというのは、全世界に出て行けという意味があるのではないかとされます。今私たちはどの説を取るのかということをお願いするものではありません。私たちがしっかり目を留めて置くべきこと、確認しておくべきことというのは、神ご自身が70人か72人の弟子たちを定められてこの人々を神がお遣わしになろうとしたということです。それが神の宣教の方法だったということです。この「遣わす」ということばは、送り出す、使命を負わせて任地に遣わす、派遣するという意味です。同時に、公式の権威ある使節、代表者として送り出すという意味ももっています。だから、イエスはこの弟子たちにご自身の権威を授けて、イエス・キリストの代表として遣わしたということを行っているのです。これは後にも出てくることです。ですから、神はそのように働き人を送られるから2節に「収穫の主に、収穫のために働き手を送ってくださるように祈りなさい。」と記されているのです。

もう一度1節を見てください。そこに「ご自分が行くつもりのすべての町や村へ」とあります。イエスはこれからこのように行こうと計画されていたのです。なぜイエスはエルサレムに上る途中にそのような町や村を訪問しようとしたのかです。それはそこにまだ神を知らない人々、このすばらしい救いを信じていない人々がたくさんいることを知っておられたからです。そして、イエスが出かけて行こうとされるのはユダヤ人だけとは書かれていません。つまり、イエスの宣教は人種も国籍も関係ないのです。イエスをご覧になったのは、そこにいる罪の赦しを得ていないさ迷っている罪人の姿です。皆この救いを必要としている罪人と映ったのです。これは私たちもこのすばらしいメッセージを伝えるときに忘れてはならないことです。そのようなイエスの思いをもって私たちも働きを為すことが大切です。

さて、イエスが行こうとされているところに、弟子たちを使節として、代表者としてお送りになったということは、私たちも神がキリストの使節としてキリストの代表者として、様々な所に送ってくださるのです。これは大きな特権であり大きな責任です。神は確かにこのような方法をとられました。つまり、このすばらしい救いのメッセージを私たちのような人間を使って全世界の人々に伝えようと言われました。そこで皆さんに考えていただきたいことは、神は全世界の人々にこの救いのメッセージを伝えるために、私たちの助けを必要としているのでしょうか？神は私たちが手伝わなければ神はご自身の目標

を達成することができないのでしょうか？いいえ、神は全能のお方ですから、私たちの助けなど必要ないのです。ご自分の望まれることを行なわれる方です、ご自分のみこころ、計画を必ず実践なさる方です。ですから、驚くことは、そのような神がこんな愚かで弱い私たちに、福音のメッセージを伝えるという大切な務めを委ねてくださったという事実です。私たちが覚えるべきことは、神はそのような方法をお定めになったということです。それが神の宣教の方法なのです。私たちのような罪深い者をお使いになるといことです。

聖書を見て行くと、まずイエスが出て行かれた、その後イエスは12使徒をお立てになって彼らを送られた、その様子がルカ9章の初めに出て来ます。12使徒を送られた後、イエスは70あるいは72人の弟子たちを派遣され、その後、全世界のクリスチャンたちを派遣しようとされます。ここから見ても、私たちのようなものを使ってくださるという方法をもって福音を伝えようとしておられるということが明らかです。私たちは神のお役に立てるのです。しかし、そのためには私たちが自ら進んで「主よ、どうぞ私を使ってください」と神に求めない限り、神はお働きにはならないのです。私は無理です、だめですと言いつつ続けているなら、私たちは用いられないままこの人生を終わってしまいます。神が与えてくださった大切な時間を無駄にしてしまうことになります。あなたは自分から進んで主に用いられたいと願っておられますか？自ら進んでキリストの福音を語り続けておられますか？働き手は不足しているのです。シカゴのムーディー教会の牧師であったW・ワーズビーはこのように言っています。「このメッセージの箇所を見て注意してほしいことは、ここに記されているのは働き人であって見物人でないことだ、確かに働き手は少ない、働き手を送ってくださいと「働き手」と記されているわけで見物人とは言っていない」と、そしてこう続きます。「余にも多くのクリスチャンは他のだれかが働きをしてくれるようにと祈っており、自分自身で働くつもりはない、だれかが遣わされたらよい、だれかが出て行ってくれたらいい、でも私は…」と。あなたはそのようなクリスチャンではありませんか？神の宣教の方法を今見ました、私のような者を使うと。使っていただくためには私たち自身が「使ってください」と主の前に自らをささげてその道を選択しなければいけないのです。残念なことに、そうしていないクリスチャンが多いということです。確かに、この働きは容易いことではありません。2節に見るように、働き手が少ないということは、働き手にかかる負担が大きいのです。また、3節では「**さあ、行きなさい。いいですか。わたしがあなたがたを遣わすのは、狼の中に小羊を送り出すようなものです。**」とあり、いろいろな危険が伴い、迫害を経験するかもしれない、友達が離れて行くかもしれない、家族があなたに敵対するかもしれない、親族があなたに背を向けるかもしれない、また、同時に、サタンもあなたたちを妨害するかもしれないのです。イエスも働きをする中で様々な迫害を経験し、サタンからも大きな妨害を受けました。パウロもそうでした、多くの迫害を経験し常に危険と隣り合わせでした。

確かに、しんどい危険の伴う働きですが、私たちは主が用いてくださるならと行って、自らをささげているかどうかです。ある牧師がよく教会員に語っていたこと「イエス・キリストに対して真剣な人はだれでもサタンの標的となる」、これは確かなことです。私たちクリスチャンが本当に神に真剣に従おうとしたら、必ずサタンは攻撃します。なぜなら、真剣な人は厄介だからです。神のみこころに忠実に従う人は神の栄光を現わすからです。サタンが望むのは中途半端に生きる人、妥協したクリスチャンです。彼らは神の栄光を現わさないから放っておいてもいいのです。だから、イエス・キリストに対して迫害するのです。その牧師は続けて「ほとんどの教会員はサタンが妨害しなければならぬと思うほどの悩みを彼に与えていない」と言います。サタンにそのように思われているクリスチャンは多いのではないのでしょうか？確かに、主に従って主の証人として出て行くということは、この10節にもあるように、人々から拒絶されることもあります。「しかし、町にはいっても、人々があなたがたを受け入れないならば、大通りに出て、こう言いなさい。」。

「狼の中に小羊を送り出すようなものです」と警告されたイエスですが、大きな慰めを与えておられます。「わたしがあなたがたを遣わす」と、つまり、イエスご自身が遣わしてくださると、遣わしてくださるイエスが遣わされるあなたとともにいてくださるのです。あなたは一人で送られて行くのではないのです。神が遣わされる、神が責任をもってくださるのです。このような羊飼いと羊の関係は聖書の中にたくさん出て来ます。その教えは私たちに慰めてくれるのですが、その一つ、イザヤ40：11を見ましょう。「**主は羊飼いのように、その群れを飼い、御腕に子羊を引き寄せ、ふところに抱き、乳を飲ませる羊を優しく導く。**」主は羊飼いでありその群れ、私たちが飼ってくださるとあります。次に「御腕に」とあります。このことは神の力を象徴したものです。全能なる神のその御力によってあなたを守りあなたを世話すると、そして、子羊とは生まれたての羊です。何もできない弱いものです。神は私たちがそういう者だと分かってくださっているのです。そして私たちが「**引き寄せ、ふところに抱**」いてくださると、私たちが歩くとつまずき道を迷うこともあるけれど、神が私たちがふところに抱いてくださるから心配しなくても良いと、そのように私たちのことを取り扱ってくださるのです。「**乳を飲ませる羊を優しく導く**」、特別に世話の必

要な羊に対してこのようにされるのです。神は私たちの弱さをご存じです。神の前に私たちは背伸びする必要はありません。そのような私たちを神は「遣わす」と言われるのです。確かに、遣わされるころは大変なところでしょう。風当たりが強いかもしれない、しかし、そのとき神は言われます。心配しなくてもいい、わたしがあなたといっしょにいるから、わたしがあなたをしっかり抱いているから、だれもわたしの手からあなたを奪い去ることはない、全能のわたしがあなたを守るからと、こんな約束をくださったのです。だから、恐れなくて出て行きなさいと言われます。

もう一度ルカに戻って、注意事項がここに記されています。2節のみことばは原語に記されていることばが明確に訳されていません。原語を直訳するとこうなります。「確かに収穫は多い。しかし、働き手が少ない。ゆえに、彼の収穫に働き手を送ってくださるように、収穫の主に祈りなさい。」と。「彼の収穫」とあります。なぜでしょう？収穫をもたらすのは神だからです。私たちが出て行ってイエスの話をして人々が信じたとしてもそれは私たちの収穫ではない、神の収穫だからです。神が人をお救いになる、神が穂を色づかせるのです。私たちはそこに行って刈り取るだけです。私たちの責任は神があなたを使うと言われるのだから、出て行ってこのメッセージを語ることです。穂を色づかせて豊かな収穫をもたらしてくださるのは神のわざです。だから、このみことばでは「彼の収穫に…」とあり、神ご自身が人々を導くのです。そのことを私たちは決して忘れてはならないのです。ですから、それを勘違いすると「私がだれかを導いた、私が救いへ導いた、私の所有である」などと言います。私たちの所有などありません。神のものです。私の羊ではない、神の羊です。救いへ導かれるのは神のわざです。収穫をもたらしたのは神のわざです。

4. 宣教のメッセージ 9-16節

9節に「そして、その町の病人を直し、彼らに、『神の国が、あなたがたに近づいた。』と言いなさい。」とあります。私たちが普段語るメッセージとは違うように思いますが、同じメッセージです。神の国が近づいたとは、これから王がやって来るといことです。最初に見たように、イエスはご自分が行こうとしていた町や村に弟子たちを送りました。彼らは王が来られると伝えたのです、神である王が。王が来られるのだから、神が、救い主が来られるのだから、あなたはそのために備えをしなさいというメッセージでした。ですから、私たちが語るメッセージと何ら変わらないことが分かります。私たちは人々に救い主が来られた、救い主を受けなさいと語ります。彼らも王が来られるから王を受け入れなさいと語ります。どの時代にあっても福音はひとつしかないのです。王を受け入れ、そして、その王を心から愛するように、心からその王に従って行くように、心からその王にお会いする日を待ち望むようにと、このようなメッセージを彼らは語るのです。そして、それは私たちが今語っているメッセージです。

そして、そのときにここに但し書きがあります。5-9節を見ると、「:5 どんな家にはいっても、まず、『この家に平安があるように。』と言いなさい。」と、彼らはこれをまずしなければいけなかったことです。そして、「:6 もしそこに平安の子がいたら、あなたがたの祈った平安は、その人の上にとどまります。だが、もしないなら、その平安はあなたがたに返って来ます。:7 その家に泊まっていて、出してくれる物を飲み食いしなさい。働く者が報酬を受けるのは、当然だからです。家から家へと渡り歩いてはいけません。:8 どの町にはいっても、あなたがたを受け入れてくれたら、出される物を食べなさい。:9 そして、その町の病人を直し、彼らに、『神の国が、あなたがたに近づいた。』と言いなさい。」とあります。ユダヤ人は旅人を手厚くもてなしました。それで、このようなメッセージを語る人を迎え入れるというのは、メッセージも受け入れているし、そのメッセージを託した方を受け入れているのです。そのことは16節に出て来ます。これはもう少し後で見ます。そのようにメッセンジャーと彼を受け入れる人々は、王に対して、神に対して心を開いているのだから、その人のところに平安があるといのです。

しかし、10節から見ると今度はそのメッセンジャーを受け入れない人々のことです。「:10 しかし、町にはいっても、人々があなたがたを受け入れないならば、大通りに出て、こう言いなさい。:11 『私たちは足についたこの町のちりも、あなたがたにぬぐい捨てて行きます。しかし、神の国が近づいたことは承知していなさい。』と、足のちりを払い落とすとい、このようなことはユダヤ人の中では頻繁に行なわれました。汚れたものを払い落とすといことです。つまり、彼らは汚れている、神に対して心を開かないから、神に逆らい続けているから、神の敵であり続けるから。しかし、彼らに対してもメッセージを語りなさい、神の国が近づいたと…、つまり、彼らがこのメッセージをどのように否定しようとも、この事実、神が来られる、救い主が来られる、王が来られる、といことは必ず実現するといのです。「:12 あなたがたに言うが、その日には、」とは神の国が到来した日、王が来られたときです。その日に何が起こるのか、「その町よりもソドムのほうがまだ罰が軽いのです。:13 ああコラジン。ああベツサイダ。おまえたちの間に起こった力あるわざが、もしもツロとシドンでなされたのだったら、彼らはとうの昔に荒布をまとい、灰の中にすわって、悔い改めていただろう。:14 しかし、さばきの日には、そのツロとシドンのほうが、まだおまえたちより罰が軽いのだ。:15 カペナウム。どうしておまえが天に上げられることがありえよう。ハデスにまで落とされるのだ。」と

このように書かれています。比較しています。イエスに遣わされた弟子たちが語るメッセージを否定した人たちに下る神の審判、さばきというのは、このソドムの町にくだったさばきよりも重い、そして、このコラジンやベツサイダの上を下ったさばきの方が、ツロヤシドンに下ったさばきより大きい、そしてカペナウムに下るさばきはとて大きいものだと言います。イエスはここで何を教えておられるのでしょうか？救いのチャンスを多くもらっていながら拒み続けた場合、チャンスが少なかった者より厳しいさばきを受けるということです。なぜなら、神が恵みとあわれみと忍耐をもって救いを与えようとしてくださっているのに、それを聞いて分かっているながら自分の意志で主の救いを、また、主ご自身を拒み続けているからです。それが16節に記されています。「**16 あなたがたに耳を傾ける者は、わたしに耳を傾ける者であり、あなたがたを拒む者は、わたしを拒む者です。わたしを拒む者は、わたしを遣わされた方を拒む者です。**」、だから厳しいさばきがあるのです。ソドムの人たちはこのコラジンやベツサイダ、またカペナウムの人たちよりも、このすばらしい知らせについてよく聞いていなかった、カペナウムはイエスのガリラヤ伝道のときに拠点とされたところです。その人たちはイエスに会い、イエスの話を聞いているのです。でも、心を開かなかった、だから、きびしいさばきがあるのです。ある人はこのようなことを聞くと、それなら、余りメッセージを聞かない方がいいのではないか、たくさん聞くとたくさん責任が出てくると…。もし、そのように思っている人がいるなら、その人は肝心なことを見落としているのです。それは、チャンスが少なからうと多からうと、救いを受け入れない者には必ず正しい神のさばきが下るといことです。神が存在していること、神があなたを愛しておられること、それはもうあなたはご存じです。そして、あなたの罪はあなたのうちに明らかです。しかし、それでもあなたは神が備えてくださった救い主のところに、救いを求めて出てこようとしません。イエスがあなたを愛して、あなたの罪を赦すと言われているのに、あなたはそれでもなお心を頑なに立て、私には必要ないと言いつづけている、だから、きびしいさばきが下るといのです。たとえ、1回しか聞いていなくても…。

5. 宣教の成果 17-20節

「**17** さて、七十人が喜んで帰って来て、こう言った。「主よ。あなたの御名を使うと、悪霊どもでさえ、私たちに服従します。」**:18** イエスは言われた。「**わたしが見ていると、サタンが、いなずまのように天から落ちました。****:19** 確かに、わたしは、あなたがたに、蛇やさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を授けたのです。だから、あなたがたに害を加えるものは何一つありません。」、弟子たちは喜び勇んで帰って来ました。というのは、彼らは神が彼らを通して為されたすばらしいわざを見たからです。彼らは奇蹟を行ないました、悪霊を追い出しました、ここにあるように蛇やさそりを踏みつけるなど、サタンの力に打ち勝ったのです。イエスの権威によってそのようなことが可能になった、それを彼らは経験しました。だから、彼らは喜び勇んで帰って来たのです。それに対してイエスは「**わたしが見ていると、サタンが、いなずまのように天から落ちました。**」とサタンの敗北のことを言われました。もちろん、イエスが十字架にかかり死後三日後にその死からよみがえってきたことによって、サタンの力を完全に打ち砕きました。しかし、この弟子たちは出て行って悪霊を追い出し、病人を癒し、悪霊の力に打ち勝った、また、イエスを信じる人たちが起こった、このようなことによってサタンは敗北し続けたのです。そのことを言っているのです。しかも、「**いなずまのように**」というのは突然起こったことを意味します。弟子たちもそのようなことになるとは思っていなかったからです。そして、「**見ていると**」と完了形が使われているので、継続してそのことが繰り返し起こったのです。これは霊的なことです。サタンが何度も何度も、イエスの権威によって行なう弟子たちのわざに敗北し続けたのです。

このようなすばらしいことがあったのですが、イエスは20節で喜びにあふれている弟子たちに警告を与えています。「**だがしかし、悪霊どもがあなたがたに服従するからといって、喜んではありません。**」と非常に大切な注意を与えています。というのは、彼らはこんな奇蹟ができた、こんなことが行なえたと自慢していたのです。気をつけないと自分が何をしたかとお互いに自慢し合うことになり、プライドの問題が出て来ます。私たちクリスチャンも同じように気をつけないければいけません。私たちが為している奉仕に関しても、伝道に関しても、献金に関しても、教えに関しても、そのすべてに自慢しているなら、気をつけないければなりません。それらはすべて神がさせてくださったことです。イエスは人々に教えました。もっと大切なものがある、喜ぶべきものが他にある、もっと自慢するもの、誇りとするものが他にある、それは「**ただあなたがたの名が天に書きしるされていることを喜びなさい。**」と、救われていることを喜びなさいと言います。神が彼らを通して為したみわざを誇るよりも、神が自分のために為してくださったみわざに感動し続けることだと言うのです。私たちが為したこと、神のために為したことなど自慢にはならない、私たちが自慢するのは神が私のために何をしてくださったか、私のような者を救ってくださった、このすばらしいみわざを覚えて、そのことをいつも感謝し感動する、そのようであればならないとイエスは言われるのです。「**あなたがたの名が天に書きしるされている**」は完了形です。もうすでに名前が記されているといのです。イエスを信じて救われた私たちの名はもう天に記されて

いるのです。もうそれは終わったのです。しかもこれは受身です。私たちがどのように頑張っても私たちは自分の努力で救いを得ることはない、神が救ってくださるのです。だから、受身なのです。イエス・キリストを信じる信仰によって神は罪を赦してくださり、私たちの名を天に書いてくださった、そのことをあなたは喜ぶべきだ、救われたことこそ私たちが自慢すべきことと言われるのです。

マザーテレサは人間の不幸に関してこのように語っています。「私たち人間の本当の不幸は貧しいことや病気や空腹で死ぬことではない、本当の不幸は貧しかったり病気だったりするためにだれからも相手にされないことだ、皆から見捨てられさびしい思いに追いやられることが一番辛いことだ。貧しい人や病気の人、弱っている人に向かって死んで行く最後の最後まで手を差し伸べることが、どんなにその人を幸せにするかもしれないので、今死にかけている人であっても、あなたはもっともっと生きてほしい、あなたはこの世に望まれて生まれてきた大切な人なのですよと、最後まで励ましてあげること、それが大切なことなのです。たとえ一人でも二人でもそうして救ってあげることが大切なのです。」と。確かに人々から見捨てられてさびしく死んで行くことは悲しいものです。しかし、人間にとって一番不幸なことは、だれからも相手にされないことではなく、主が罪の赦しを備えてくださったのにそれを拒み続けて永遠のさばき、地獄に行くことだと、聖書はそのように教えています。これが最も不幸なことです。地獄に行った者はそこでどんなに悔い改めても救いも希望もないのです。イエスは死にかけている人の傍にいて手を差し伸べ励ましてあげなさいと、そのようなことを教えるためにこの世に来られたのでしょうか？イエスがこの世に来られたのはご自分のいのちを投げ出して、私たちに罪の赦しを与えようとしてくださったのです。**「わたしは世をさばくために来たのではなく、世を救うために来たからです。」**

(ヨハネ 2：47) と言われました。この罪の赦しなく永遠の滅びに至ることこそが、人間にとって最大の不幸なのです。その不幸から救うためにイエスは来てくださったのです。

私たちはこのすばらしい福音のメッセージを伝えるために救われたのです。あなたはこの主の使節として、代表者として用いられたいと思いませんか？あなたを最大の不幸から救ってくださった偉大な主の救いを伝える者として用いられたいと思われませんか？そして、一人でも多くの人の名が天に記されるために用いられたいと思いませんか？それはあなたが決めなければならない、でも神の約束はあなたを使ってくださる、用いてくださるです。主に用いられる者として歩んでください。主はあなたを通してすばらしい救いを人々に明らかにされます。そのためにはあなたが「主よ、私を使ってください」と決心しなければなりません。その決心をもって今日この場を去ってください。